

やよいど きひろくちつぼ
弥生土器広口壺 土田遺跡



写真1 土田遺跡SZ05出土の広口壺

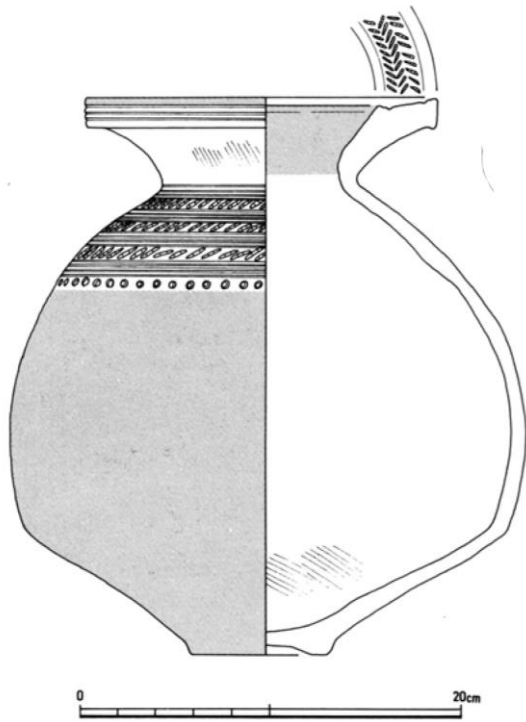


図1 土田遺跡SZ05出土の広口壺実測図
(文献1より)

この土器(写真1・図1)は、名古屋環状2号線(一般国道302号)の建設に伴い、昭和56年から60年にかけて実施された土田遺跡(現・清須市)の発掘調査において出土した壺形土器です。

土田遺跡は五条川下流域の自然堤防帯の展開する微高地上に立地しており、弥生時代末から古墳時代、平安時代末から室町時代にかけての遺構が確認され



図2 土田遺跡の位置

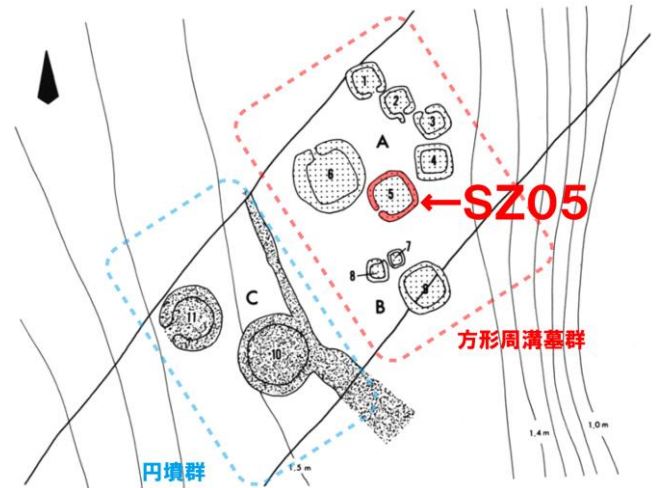


図3 土田遺跡の墳丘配置(文献1一部改変)



写真2 土田遺跡SZ05(文献1より)

た複合遺跡です。調査では弥生時代末から古墳時代初頭の方形周溝墓が密集して9基見つかったことから、その当時は土田遺跡の場所は墓域として活用されていたと考えられます。紹介する壺形土器はそのうちの1基の溝から出土しました。

この壺形土器の出土した方形周溝墓は、SZ05と名付けられた遺構で、規模は13m×13.5mを測り、調査されたもののなかでみると、つくりの大きなものの一群に分類されます。溝は全周せず、西側

の溝の中央に、内と外とを繋ぐ陸橋が設けられています。壺形土器は北側の溝から出土しています。S Z O 5からは、他にも壺や高坏が出土しており、いずれも方形周溝墓に供えられたものとみられます。紹介する壺型土器の最大の特徴は、その鮮やかな赤白のコントラストと精緻な文様です。コントラストは、土器の白い素地に赤色顔料を塗ることで生み出されたもので、極めて高い装飾性を有しています。また赤彩が施されているのは無文の部分で、土器の白い素地が残る分厚い口縁部や肩の部分には、工具を用いた刺突や直線の細やかな文様が施されています。このような土器は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて濃尾地方を中心にみられるもので、「パレス・スタイル」壺と呼称されています。

「パレス・スタイル」壺の呼称は日本近代考古学の父として知られる濱田耕作が、その優美さを称えて用いたことに始まるとされています（濱田 1929 「日本古代土器」『史前学雑誌』第1巻第4号）。濱田が例示した資料の一つは、東京国立博物館に所蔵されている尾張熱田貝塚（現・高蔵遺跡：名古屋市）の出土資料です。現在は国の重要文化財に指定されており、優品であることが覗われます。また、土田遺跡と同じ清須市内にある朝日遺跡出土資料で、同じく国の重要文化財に指定された資料群のなかにも「パレス・スタイル」壺が含まれています（写真3）。

濱田耕作が挙げた資料には、土器に赤彩が施されていないものも含んでいることから、当初は赤く塗られていることは「パレス・スタイル」の条件ではなかったようです。しかしその後の研究の中で、白地の素地に鮮やかな赤彩が施された濃尾地方の壺を

示す用語として「パレス・スタイル」壺という呼称が定着するようになりました。なお、濃尾地方の土器には、高坏や器台といった壺以外の器形の土器にも同様の装飾が施されるものが認められることから、総じて「パレス・スタイル」土器とも捉えることができます。弥生時代後期後半には、高坏や小型壺、器台等への特徴的な施文は認められなくなりますが、広口壺については赤彩も他の文様のような施文の要素として残り、土器そのものに対する施文が少なくなっていく古墳時代前期に至るまで引き継がれています。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、この濃尾地方の土器は近畿・関東といった遠隔地にまでもたらされていることで知られています。「パレス・スタイル」の壺もその一つとして、遠隔地にもたらされました。そして、その地で形を崩しながらも作り続けられたことが判っています。「パレス・スタイル」土器は、本資料のように墓から出土する事例が多く、儀礼に用いられた土器であると考えられます。遠隔地でも、この土器が作り続けられたのは、この土器を使った儀礼行為が重んじられたためなのか、はたまた土器そのものを作り続けることに意味があったのか、正確な理由は判っていませんが、装飾性の高く優美なこの土器に、当時の人々も魅了されていたのではないのでしょうか。

参考文献

- 1 愛知県埋蔵文化財センター1987『土田遺跡』調査報告書第2集
- 2 愛知県教育委員会 2013『朝日遺跡 よみがえる弥生の技』展示解説書



写真3 朝日遺跡から出土した赤彩色された土器（重要文化財）（文献2より）